

近松淨瑠璃集

上

昭和五年六月十日 印刷
昭和五年六月十三日 發行

有朋堂文庫
近松淨瑠璃集上卷

(非賣品)

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

編輯者 塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷兼發行 三浦捷一

東京市神田區錦町三丁目九番地

印刷所 有朋堂印刷所

東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所 有朋堂書店

不許複製

近松淨瑠璃集 上卷 目錄

出世景清

第一		一
第二		七
第三		一四
第四		二〇
第五		二八

源氏冷泉節

上之卷		三五
下之卷		四六
冷泉節		五六

松風村雨束帶鑑

釋迦如來誕生會

第一		六一
今様うばぞろへ		六六
第二		七八
第三		九一
龍神風流		一〇四
第四		一〇八
司の前道行		一〇八
當世獨樂盡し		一一一
第五		一一五
第一		一二一
第二		一三三
第三		一四六
悉達太子道行		一四六
第四		一六二

百日曾我（一名團扇曾我）

第五		一七九
第一		一八五
第二		一九九
けいせい請狀		二〇四
第三		二一〇
第四		二二〇
とら少將道行		二二二
三ぶきやう		二二七
第五		二三二
歌仙		二三六

源氏烏帽子折

第一		二四一
第二		二四八

長町女腹切

常磐御前道行		二四九
第三		二五六
烏帽子折名づくし		二六〇
第四		二六三
第五		二六九
牛若宮めぐり		二七二
上之卷		二七五
中之卷		二八六
お花半七道行		二九五
下之卷		二九六

淀鯉出世瀧徳

上之卷		三〇五
あづま勝二郎初めん		三二一

蟬 丸

下之卷・・・・・・・・・・三二三

第一・・・・・・・・・・三三七

きふれ詣で・・・・・・・・三三二

第二・・・・・・・・・・三四五

第三・・・・・・・・・・三五二

蟬丸あふさか山入道行・・・・・・・・三五三

第四・・・・・・・・・・三六〇

第五・・・・・・・・・・三六六

懷胎十月の由來・・・・・・・・三七一

最明寺殿百人上臈

上之卷・・・・・・・・・・三七五

義經含狀・・・・・・・・・・三八一

下之卷・・・・・・・・・・三九九

曾根崎心中（お初天神記）

最明寺殿道行・・・・・・・・三九九

女勢揃へ・・・・・・・・・・四〇九

道行血死期の霜・・・・・・・・四三八

源五兵衛
おまん薩摩歌

上之卷・・・・・・・・・・四四三

諸國鎧標・・・・・・・・・・四四六

中之卷・・・・・・・・・・四六一

下之卷・・・・・・・・・・四七九

源五兵衛おまん夢分船・・・・・・・・四七九

おふさ
徳兵衛重井筒

上之卷・・・・・・・・・・四八九

中之卷・・・・・・・・・・四九九

下之卷	五一〇
道行血汐のおぼろぞめ	五一〇

雪女五枚羽子板

上の卷	五一五
初春厄はらひ	五一九
中の卷	五三二
もんさく系圖	五四九
下の卷	五五九
源義教公道行	五五九
近松淨瑠璃集上卷總索引	五七一

出世景清

第一

普門品―法華經
廿五章觀音經
大乘八軸―實教
を説ける法華經
八巻

わりなし―隔て
なし

扱さくも其その後のち、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大乗八軸の骨髓こつずる、信心しんじんの行者大慈大
悲ひの光明くわうみやうに預り奉る觀音智力ちりきぞ有難あやうき。爰こゝに平家の一族惡七兵衛景清びやうななへききよは、西國四國かっせんの合戰
に討死うちじすべきものなりしが、死しは輕かろくして易やすし、生せいは重おもくして難かたし、所詮しよせん命いのちを全くわうして平
氏じの怨敵をんてき、右大將賴朝ひだりを一太刀恨ちうらみ、平家の恥辱ちじよくを雪すいがんと落人おちうぢとなり、尾張あつたの國熱田
の大宮司だいぐうじに、いさゝか知るべありければ、深ふかく忍しのびて居ゐたりけり。素すより大宮司だいぐうじは平氏へいじ
の重恩じゆうおんの人なれば、深ふかくいたはり、ひとり姫ひめにをのの姫と聞えしを景清にめあはせ、子
とも婿むこともかしづき給ふ心ざしこそわりなけれ。景清大宮司おんまへの御前ごんまへに出いで、「誠まことにそれが
し無二むにの御懇志ごんしに預り、ながく在居ざいきよ仕り、身みは埋木うめぎと朽果くちかん、末すえ頼よりみなき身みながらも、
せめて賴朝を一太刀うかどひ、君父の恨を散じ、その後は腹切て兎も角も罷りならんと

四相—我相、人
相、衆生相、壽
者相

ござんかれ—こ
そあるなれの約
構へて—注意し
て

空しき月日を送り候。然る處に今朝屈竟の事を聞出し候。其故は、鎌倉殿は南都東大寺大佛殿を御再興あるべしとて、秩父の重忠かの奉行を承り、きのふの暮ほどに此處をうつて通り候よし。たとへば頼朝七重八重の城廓に取こもり、天地に黒鐵の網を張つて用心きびしく候とも、此景清が一念にてなどか狙はで候べき。去ながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば、其身は都にありながら、心はなほ鎌倉殿の側にあり。かう申す景清は二相を悟り候へ共、重忠は四さうを悟る。頼朝に出合既に討んとせしこと三十四度に及べども、彼の重忠に隔てられ、終に本望遂げ申さず。然れば先重忠をさへ打取らば、頼朝を打ん事踵を廻らすべからず。重忠此度東大寺の奉行にのほる事幸かな仕合哉。天の時來りたり。忍びやかに南都に下り、重忠が首ひつさけて參らんに早お暇」と申さるゝ。大宮司聞給ひ「實に屈竟の時節ござんなれ。構へて人に悟られ給ふな。急いて事を仕損ずな。片時も早く」とありければ、北の方も浚びて、宗盛公よりたび給ふ、痣丸といふ名劔を景清に給はり、北「首尾よく仕果せ給ひなば一日も逗留なく、早く御歸りませ」と門出の盃出さるれば、たがひに千秋萬歳と、獅子の勢龍の勢、いさみいさみて行く虎の、尾張の國を立出て、奈良の都へ三重上らるゝ。いで其頃は、文治五

松にも云々―藤
が松にも花を貸
すの言掛け
横目―見張り役

柳櫻を云々―青
白を交へる、古
今集の歌を引く

むべも云々―此
殿は宜も富みけ
りの歌をとり屋
棟が三つも四つ
もあるを云ふ
つきせぬ―月に
かけて西方淨土
を利かせたり

年春過ぎて夏きにけらし白旗の、源氏の大將頼朝公は、南都東大寺大佛再興の御願にて、
畠山の重忠奉行職を承り、松にも花を春日野や、飛ぶ火の野邊に假屋をうたせ、横目帳
つけかんぢやうがた
附勘定方、大和大工に飛驒匠、杣人木作り事をはり、今日吉日の柱立。我身は棧敷に一だ
ん高く、村農の大幕打せ、つゞいて見えしは本田の二郎、其外のさぶらひども、帳場々々
に標を立て、弓鎗長刀ふきぬきに、やなぎさぐらをこきまぜて、花やかなりける御ふし
んなり。かくて番匠の棟梁、木工の頭修理の頭、おのがしななる出立、吉方にうちむかひ、
まづやがための、祭文を唱へつゝ、御幣を振て再拜し、手斧はじめのその儀式、嚴重に
こそつとめけれ。むべもとみけりさきくさの、みつば四つばの大伽藍、手斧はじめの壽
に、千代をかためて柱立。春は東に立そむる、是萬物の初めなり。夏は南にめぐる日
の、あやめが軒やかほるらん。秋は又西の空、盡せぬ契かたどりて、天の河原に橋柱、
しらけたつるや檣鉋、雲をそなたに遣鉋。冬は北にて筒井筒、水こそ家の寶なれ。め
ぐれやまはれ井戸車、かまど賑はふへつゝい殿。先づ陰陽の二ばしら、二本のはしらは女
神男神を表したり。三本のはしらは、三世の諸佛、四本のはしらに四天王、四海泰平民
安全と祝ひこめたる墨壺の、いと直なる國なれば、寶や宿に三目錐。鋸屑のかずく、

兜率天―六欲天
の第四にて彌勒
の法を説かる所

ふきたて―瓦に
鎔き入る
こまろ―垂木の
端
度―米倉

と、濱の眞砂と君が世は、かぞへつくさじおもしろや。しかるにこの大伽藍と申すは、
聖武皇帝の御建立、三國無雙の靈場なり。兜率天の内院を、さもありくくに移さるよ。
塔の高さが二十丈、佛の御丈十六丈、雲につゞけばおのづから、月を後光と三笠山、柱
のかずは天台の、一念三千の機をあらはして、三千本と定まれり。軒の檻は法華經の
文字のかず、六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。さて正面より四方四面の、
とびらくの彫物には、松に唐竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を争ひ、百千萬のけだ
ものをほつたてく、くるりくと巖に追上け追下し、風に嘯ぶく波間より、紫雲を
巻て登り龍又くだり龍、玉をつかんで虚空にさよけ、鱗を立たる其いきほひ、手をつく
させて彫りつくし、扱棟瓦檐瓦、金銀瑠璃玻璃、碑礪瑪瑙、珊瑚琥珀水晶をふきたてふ
きたて、珊瑚樹のこまろをひつしと打たる臺には、金欄錦に柱を包んで黄金の鉈を輝かせ
ん。棟木を負ふの柱をして、南畝の農夫よりも多く、梁を架するの椽は機上の工女より
も多く、釘頭の磷々たるは、度にあるの粟よりも多く、旦暮の説法讀誦の聲は、市塵の
言語よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎮護の大伽藍、如意満足のはしら立。めでたしく、
チ、めでたしと、手斧おつ取りてうくく。槌おつ取てはつしていく。鉋取延さ

色代―挨拶

緩怠―積著、失禮

ぞんざい―粗忽

推參―無禮

かだ―ずるい事

らくらく、えいさらさらと、打始め取始め、三々九度の御酒をさよ
け、千たび百たび祈念して、重忠に色代し、棟梁座をぞ下りける。手斧はじめも事すぐ
れば、数千の番匠下々まで、皆々小屋にぞ三重入りにける。はるかの跡より、四十ばかり
りの男なるが、人足とおほしくて、晝餉の櫃をになひ、頼冠りして通りける。秩父の執
權本田の二郎きつと見て、「ヤア是成下郎めは、かゝる晴いの庭なるに、頼冠は緩怠なり。
色代せよ」と咎むれば、かの男小聲になり「作法もしらぬ下々なれば御免」と云ひてつつ
と通る。本「どこへく。扱々ぞんざい千萬なる奴めかな。頼冠を取ずんば、誰かある、
それ打て擲け」と下知すれば、中間共承り一どにはらりと取まはす。番匠の棟梁此よし
を見るよりも、棟「いや是本田殿、彼奴は其日雇ひの人足にて、差別も知らぬ下郎なれば、
さぞ推參も候べし。去ながらかゝる目出たき折なれば、たゞ何事も穩便にはからひ給へ」
と申ける。本田聞も入れず、「いやさ、彼めはちと人に似たるものの候」といへば、棟「扱
めづらしや本田殿、人が人に似たるとは事新しう候。いかに下郎め、おのれ大分の錢を取
りながら、かだをして働かず。横著ひろぐゆるゑにこそ人々にも怪まれ、祝儀に邪魔をな
しけるよ。價を損にする迄ぞ。罷り歸れ」と叱りければ、「よき幸」と景清は荷ひし櫃を下

餘すな—逃がす
な

尾羽云々—浪人
者の妻れし貌
(俳言集覽)

しおき、迷惑さうにもみ手をして、表にこそ出らるれ。重忠幕の内より御覽じて、罵し
ばらくしばらく。いかにかたぐ、平家の落人こゝかしこに忍びるて、君を狙ふと聞きけ
るが、唯今の入足は、まさしく悪七兵衛と見しはひがめか。彼餘すな。いふても是は一大
事の柱立の淨めの庭。穢らしてはいかどなり。前なる野邊に追出し打て捨てよ」と宣へ
ば、もとよりはやる關東武者、我もくとかけむかふ。景清是をみて、になひ棒に仕込み
たる件くだんの痣丸あざまるするりと抜いてさしかざし、大ぜいを左手にうけ、頭を叩いてからくくと
笑ひ、是はお侍、某は尾羽を枯せし鎌倉の浪人者にて候が、朝夕に迫り、かゝる佗しき
いとなみを仕る。さすが人目の恥かしく、顔をかくして有ければ、なんぞや某を悪七兵
衛とは、眼がくらみてありけるか。たゞしは其景清が恐ろしさに面影に立けるか、よし何
にもせよ。是程まで雑言せられ、堪忍罷ならず。景清程こそあらず共、そつと手なみを
みせんず」と、例の痣丸小脇に搔込み、多勢が中に割て入り、火水になれと三重切合け
る。時刻もうつらぬ其内に、十四五人切ふせ「重忠に見參せん」と、此處のつまり彼處
のくまに駈入りくさわけども、大勢にへだてられ、景今ははや是迄なり。深入して雑
兵共に手負ふせられては、景清が末代の名折なり。またこそ時節あるべけれ。いでおつ

拂うて落ゆかん」と番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿手斧鋸鉋、屈竟一の手裏劔と、おつ取りおつ取り打立れば、さしもに勇む軍兵共、わつといふてはさつと引。なほも寄來るもの共を、小屋の小柱引拔て、八方無隅に三重ふりまはれば、秋の嵐にちる紅葉、むらくばつとぞ逃げにける。是「ヲ」さもさふづさもあらん。此たびは仕損ず共、此景清が一念の劔は岩を徹さんものを」と、跳りあがり飛あがり、齒がみをなして行く雲の、月の都に上りける。惡七兵衛が力業、早業輕業神通業、唯飛ぶ鳥のごとくなりとて、恐れぬものこそなかりけれ。

第二

薪を云々―無骨
者も花を慕ふ、
景に蔭をかく

去程に、誠や猛武士も、戀に窶るゝならひあり。薪を負へる山人も、たちよる花の景清も、つねに清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片ほとりに、阿古屋といへる遊君に、假初伏のかり枕、いつしかなれて今ははや、二人の若をぞまうけける。兄のいやいし六才、弟のいや若四才にて、世におとなしくぞ見えにける。阿古屋はもと

しほ―機會

ずんど―最の意
(俚言集覽)

より遊女なれ共、妹脊のなさけ細やかに、世になき景清をいとほしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家督をつがせんと、ならはぬ女の身ながらも、兵法の打太刀し、武道を教ふる心ざし、たぐひ稀にぞ三重聞えける。かゝる所へ、惡七兵衛景清は重忠を打損じ、やうくとして清水や、あこやが庵に著給ふ。女房子供を引連れ、阿こは珍らしや何として御上り候ぞ。先こなたへ」と請じける。景清申しけるは、「ないく御身も知るごとく、我平家の御恩を報ぜんため、鎌倉殿を狙へ共、其かひなくて一兩年は、尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此度畠山の重忠東大寺再興の奉行に上るをよきしほと、先重忠を狙はんため、我身を卑しき下郎にしなし、すでに間近く附寄しが、運強き重忠にて、我らが智略現はれ、本意なくも打損じ、一向に重忠と刺違へ死なんとは思ひしが思へば御身がなつかしく、子供が顔をも見まほしく、無念ながらもながらへて、扱唯今の仕合せなり。誠に久しく逢ぬ間に、子供もいたう成人し、御身もずんと女房をし上たり。なんでもこよひはしつほりと、積るつらさを語らん」と、しととよれば、阿ゑと榮耀らしい。かく浪人の憂身といひ、殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便も仕給はず。ヲ、それも道理よ。此ごろ

うちぶる―物憂
くある、裏にか
けたり
をかしい迄―迄
は無意戦の強辭

八幡―誓詞

犬が食ふ―夫婦
争は犬も唯はぬ
の諺を當時は食
ふと云へり

聞けば大宮司の娘、をのの姫とやらんに深い事と承る。尤かな、みづからは子持筵のう
らぶれて、見る目にいやとおほすれども、子に絆されて御出か。恪氣するではなけれども、
浮世狂ひも年による。しや、眞にをかしい迄、よい機嫌じや」と有りければ、景清打わら
ひ、「是は迷惑。其大宮司の娘をのの姫には、しかく物をもいはばこそ。八幡々々さふ
した事で更になし。そちらで世の中に、いとしい者が有べきか」と、なほこそもたる
る袖枕。阿古屋も心打解て、思ふあまりの戀いさかひ。犬が食ふとや是ならん。銚子盃
たづさへて、いや石に酌とらせ、三とせ積りし物語、かたらひあかし給ひける、契の程
こそゆかしけれ。景清のたまふやう、「我久しく尾州に蟄居して、観音参詣怠れり。在京
の間は一先日参の心ざしあり。さりながら是より毎日往来せば、人の咎めも如何なり。
とどろきの御坊にて、一七日は通夜申す。やがて歸り對面せん」と、編笠取て打かづき、
おもてを指して出給へば、いや石門迄送り出で、「さらばく」の小手招き、しほら
しかりける生先なり。こよに阿古屋が一腹の兄、伊庭の十藏廣近は、北野詣をしたりし
が、大息ついでわが家にかへり、妹の阿古屋をかたはらに招き、「是を見よ、誠に果報は寢
てまてとや。惡七兵衛景清を討てなりとも、搦めてなりとも参らせたる物ならば、勳功

兵衛—景清

遁れふ—身を引く

女さかしう云々
—女が出過ぎて
失敗する意の諺

は望次第との御制札を立られたり。我らが榮華の瑞相此時と覺えたり。兵衛はいづくに有けるぞ。はや六波羅へ訴へて、一かど御恩にあづからん。いかにく」と申しける。阿古屋はしばし返事もせず、涙にくれてゐたりしが、「なふ兄上、そもや御身は本氣にて宣ふか。たゞしは狂氣し給ふかや。わらはが夫にて候へば、御身のためには妹婿。此子は甥にて候はずや。平家の御代にて候はば、誰かあらふ景清と、飛ぶ鳥迄もおちし身が、今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我々を頼みて御入候ものを、たとへば日本に唐土をそへて給はるとて、そもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懷に入る時は狩人も助くるとよ。きのふ迄もけさ迄も、隔てぬ中をそもやそも、遁れふ物かさりとては、人は一代名は末代、思ひわけても御覽ぜよ」と、泣いづくといつとどめける。十藏からくと打笑ひ、十やれ名ををしみて徳をとらぬは、昔風の侍とて當世は流行らぬ古い事。其上御邊が夫よ妻よなんどとて、心中立てはしけれ共、あの景清はな、大宮司が娘をの嬢に最愛し、御身が事は當座の花、後悔する共叶ふまじ。女さかしくて牛賣れぬとは御分が事ぞ。諸事は兄に任せよ」と、とんで出れば又引とどめ、阿いや大宮司のむすめは人のいひなし惡口ぞや。景清殿にかぎりさやうのことは候まじ。よし人はともかくも、わ